

国土交通省国土地理院『地理院地図』より筆者作成

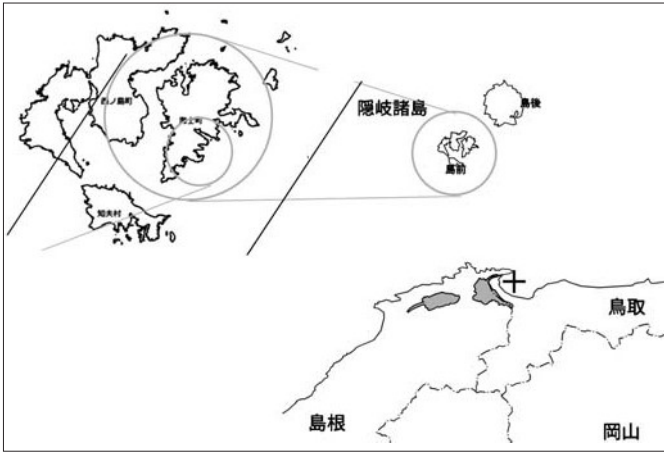


図1 海士町の位置
隠岐諸島は4つの有人島と約180の小島からなる。

特集インタビュー

挑戦の島・海士町で考える

株式会社「風と土と」 代表取締役

取締役

あべ ひろし
阿部 裕志氏
ながしま たけとし
長島 威年氏

人口2,200人―海士町は、島根県の北、日本海に浮かぶ一島の小さな町である。「ないものはない」をスローガンに、財政

破綻寸前の状態から、17年間で移住者を780人に増やすまでに立ち直った地域再生のモデルの町として知られている。

「破綻寸前の状態から、17年間で移住者を780人に増やすまでに立ち直った地域再生のモデルの町として知られている。」

今回お話を伺うのは、

移住者が2割の島 何を守るために何を变えるか

そんな移住者の一人でもある株式会社「風と土と」の「ベック」こと阿部氏と「カントク」こと長島氏。「風と土と」では人材育成事業や出版事業のほか、地域づくり事業として町の総合戦略の策定にも携わっている。お二人は、海士町は「成功事例」ではなく「挑戦事例」と口を揃える。「人間として失いたくないもの」「地域ら

（阿部） *以下敬称略
人口が2,200人で、過去17年間の移住者の数は780人。その内の46%が残っているから、人口の16%が移住者ということ。特に小中学校の保護者で見たら、移住者が半分以上じゃないかな。よく聞かれるのが、移住者だらけになったらその土地らしさはなくなるんじゃないの、と。僕の中には、何を守るために

何を変えるか」という問いが変わらずあって、地域って、何か大事



写真1 海士町の風景
豊かな自然を活かして、農業と漁業を主な産業としている。

国勢調査・住民基本台帳(2021年)をもとに筆者作成



図2 海士町における世帯数の推移
ここ10年間で、世帯数は100世帯近く増加している。

ていうのは地域らしさ。海士で言うとは、海で遊べる大人、素潜りとか船とか、冗談言える人、祭り、方言、民謡：そういう人がいなくなったら、何か違う。「わがトコ・わがコト調査」で海士らしさを言語化したつもりんだけど、人口が増えてもそれが下がる。逆には、海士らしさを守るために、変えなければいけないこともたくさんある。

挑戦が続いていくために

始まりだした「攻め」の

Iターン

(阿部)

今やっているのは、人材育成事業、出版事業と地域づくり事業。

根幹はずっと一緒に、人と人が

支え合い、自然とともに生きていく人が世の中に増えるような人づくりをしたい。最近では、「色んな人が挑戦しやすいプラットフォームをどう作るか」という方に関心が向いている。特定のリーダーが挑戦するっていうのは職人技的になっちゃうから、その人がいなくなると終わっちゃうんだよね。僕が取締役を務めているAMAHORルディングズという第三セクターの会社では、「未来共創基金」(図3参照)という新しい事業のチャレンジをする人に伴走して、お金も支援される仕組みを作った。

14年前に海士町に移住した当初、これから三つのステージがあるな

と思った。最初のステージは良くも悪くも移住者が目立つんだよね。

僕の場合、トヨタをやめて移住して起業とか、キャッチーだね。

第二ステージが、地元メンバーが

いよいよここは俺の島だぞって奮

い立つ。そして第三ステージが、

その背中を見て育った子供らが大きくなって、人生の「逃げ」ではなくて「攻め」として帰ってくる

とき。その子たちがこの島をもっとこうしたいんだってなる時が本番だと思って、今それが始まりだしている感覚はある。

フラットで冗談好き

地域を守る覚悟のある人がいた

(阿部)

僕が海士町を好きだと思ったのは、地域を無人島にしないための覚悟を持った人がいたから。この島を良くしたい、守りたいっていう願いの強さだね。よそ者を受け入れることで時にはトラブルが起きることも分かっているんだけど、そんなの大したことはない

を調べた独自の住民調査。町の総合振興計画にも反映された。

(1)「わがトコ・わがコト」調査(2017年)・ブータンの国民総幸福の9分野に加えて、家庭の自給率やおすそ分けの頻度について、住民の考えや行動

と。移住者を拒むのはいいんだけど、その結果、やがて集落が衰退していくことは間違いないからね。僕がこの島に移住してきた時は29歳だったけど、移住してすぐに色んなステージに立たせてくれた。石破大臣が来るとか、首相官邸まで一緒に行くとか。よそ者にそんなことをさせてくれる地元の人ってすごいなって。気持ちのいい人がいっぱいいたんだよね。

(長島)

フラットな人は多いよね。あとは、返しがいちいち面白い。機転

が利いていて、会話の達人だよ。島にエンタメこそないんだけど、便利さで幸せを感じるんじゃないかと日々の会話で幸せを感じるから、動きがあるわけ。毎日同じ商品だと飽きちゃうけど、会話は毎日変わって飽きないから、一番自然な楽しみだと思ってる。

(阿部)

本当に将来は京都か海士かとい

うくらい、京都は大好き。大
学ではアウトドアサークルに
入ったんだけど、山で会った
ら挨拶するし、本当に知らな
い人同士で助け合うとか、旅
先でおっちゃんとお会って奢って
もらいながら人生の話聞くとか、
人間ってあつたかいな、面白いな
っていうシーンが沢山あった。そん
な頃、たまたま山から帰った翌日
に、満員電車でぎゅうぎゅうになっ
た横のおじさんに小突かれてこの
野郎と思うことがあって。イラッ
としたけどその時、もし旅先で出

会っていたら人生語る人なんじゃ
ないかって思った。その瞬間に世
の中が変わって、僕とこのおじさ
んは仲が悪くないやない、ぎゅう
ぎゅうに詰め込むから仲悪くなっ
ちゃうんだ、詰め込む仕組みが悪
いんだと。それを考えていくと、
高度経済成長の中で生まれた満員
電車という仕組み、たしかに物質

図は、一般社団法人海士町未来投資委員会HPより引用。

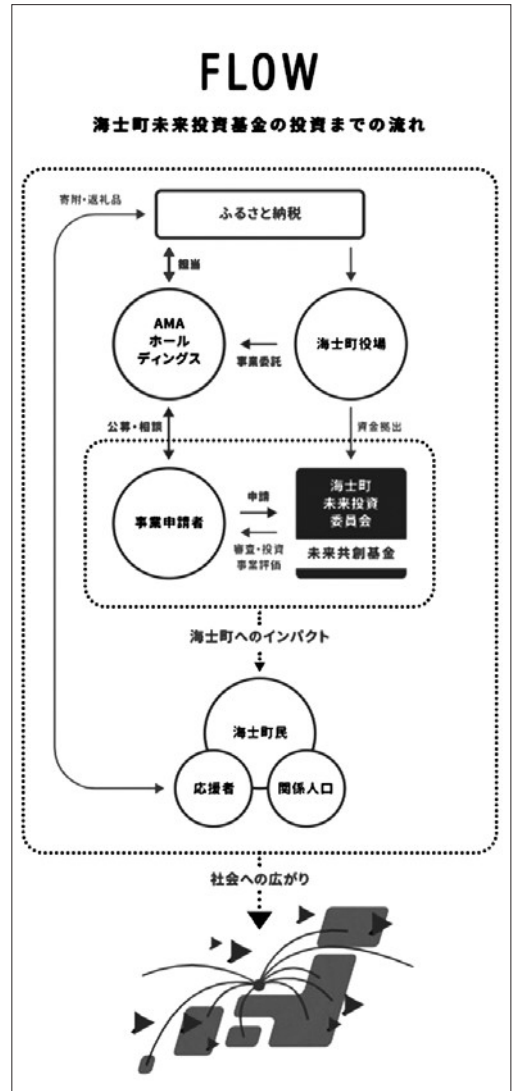


図3 海士町未来共創基金
2020年12月に設立。ふるさと納税の25~30%程
度を原資として、島の未来につながる事業に対
して資金・経営面からサポートするという仕組み。



写真2 如意ヶ嶽(大文字山)から望む京都の市街地

的には豊かになったんだけど、これでいいんだろうかと思いはじめた。そう思うと世の中おかしな箇所が色々見え始めて、「世の中ほんとうに幸せになったの?」「そうじゃないんじゃないの?」という情熱が湧いてきた。死にそうな顔したサラリーマンのおっさんの肩をぽんと叩いて、「死なないから」と。そういうことを言いたかった。

ちよつとずつ日常を変えていきたい半年で移住決めた

(阿部)

「世の中このままで良いの?」って言うときに、手段として何が良いのかは当初僕には全然分からなかった。そこで考えたのは、隣の人から小さく確実に変えていこうと。その手段として、自分の思う価値空間としてのペンションを作ること考えた。泊まっていく間に語りあって、刺激を受けた人が帰ってからちよつとずつ日常を変

えていく。ただ、大学院を卒業したばかりの人が、「皆さん世の中はこのままでいいんですか?」と。想像してみても伝わる気がしないわけ。だから、最初はもつとど真ん中をやるうとおもったのね。5年か10年トヨタに行った後、コンサルで色んな経営者と一緒に仕事やって経営を学んで、世の中の真ん中が見えてきた中で40歳前後でペンション開始、というのが、僕が大学時代に悩みに悩んだキャリアプラン。

ただ実際には、4年目に会社をやめて、コンサルもすつとぼして移住した。海士町を知ったのは、トヨタの同期から面白い島があると聞いただけ。最初に来た時にいろんな挑戦を仕掛けている課長たちとも会って、「いいな」って1回目です。そこからは半年くらいで、海士に来たいということ町長に伝えた。僕は死ぬときに後悔しない道を選ぶ、という人生観をもっていた。すぐに海士町に

移住して、現場で汗と涙と血を流して自分でやったものこそが後々必要とされるに違いない。世の中を変えていく道があるとしたらこれだと、感覚で決めたというのが移住の経緯。どう生きたいのかを考えたときに、旅先で出会う人と助けあう感覚や温かみ、支配できるわけではない自然の中で当たり前になっていく、そういう感覚を社会に広げたいなというのは大学時代から変わっていなくて、ただ宿じゃなくて島という場所にフィールドが変わっただけ。

2200人の島でできるのなら
2200人の会社でもできる

(長島)

ベックとは、去年の八月に海士に来て「巡の環」の研修で知り合った。年末にベックが東京来た時に、「会社辞めようと思ってるんだよね。」って言った。「採用を考えているんだよね。」って。「あれ?

(笑)」って。そのつもりは全然なかった。

大企業で3,4年くらいやってるとき、「〇〇課の課長代理」とかって呼ばれるんだよね。名前じゃなかったりするわけ。課長って何ですか。どういう人格ですか。そういうのに違和感があった。こっちは2200分の1だから、替えがないんだよ。俺を活かすにはどうすればいいのかって感じがあるから、それは人間的にも幸せじゃない。幸福度とかいうけど、一番幸せなのは人から求められている時だと思う。

俺的にはこのサイズが面白かったね。社会のサイズが。都会だと、出っ張っている部分だけ見せて他を隠す感じ。本来は360度全部見せないで、どういうピースがまるのか分からない。このサイズだと、360度見えちゃうから楽だよ。どこを出してもいいからさ。でも、それが人間でありって感じがすごいして。そういう感覚

が大企業でもあったら面白い企業が生まれるな、みたいことは今も思っている。2200人の島でできるんだったら、2200人の会社ではできそうだと。

地域のためは誰のためか

(阿部)

だいぶ長いこと地域のためにやってきた。そのことには意味があるんだけど、今逆に思うのは、「地域のためって誰のため？」って。前身の「巡の環」は会社よりも海士が上位概念で、海士町が良くなるために何でもする会社だった。結果、事業も組織も育たず、社員がいつまでも安い給料のまま資金繰りに苦労していた。そういうのが爆発して、ある時半分くらいの社員がやめちゃったんだよね。ほんとにつらい経験で。その時に、順番が間違っていたと気づいたわけ。良い会社を作った結果、地域に役立つという会社にならないと

誰も幸せにならないと。今でこそカントクも入ってきてくれて、会社が色々良くなってきているんだけど。

総合戦略とか作っていく中で、海士の未来みたいなのはさんざん考えてきたし今もやっているけど、特定の人で終わっちゃうものは

2008年	1月	(株) 巡の環設立
2018年	9月	(株) 風と土とに社名変更
2019年	2月	英治出版 株式会社と提携し出版事業開始
2020年	▲月	初の増資 資本金750万円に(初株主!)
2021年	4月	創刊本となる『進化思考』上梓
2021年	12月	2冊目となる『「わかりあえない」を越える』上梓

図 4 会社沿革

後に続かないし、次の人が育ってこない。地域のためというより、誰か想いを持った担い手がいつ続ける状態を作ること。それが大事だなと最近思ってきている。

“成功事例”ではなく

“挑戦事例”

(阿部)

その状況下での成功でしかなくて、また次の問いが来るからね。全然終わらない。前に成功事例じゃなくて挑戦事例ですと。良い言葉だよ。成功している」と思った時には、もう衰退が始まっている。挑戦って言い続けないと、何が狂っちゃう。それこそ思考停止になって繰り返すって方になるし。

(長島)

成功は相手を感じるものであって、自分らが感じるものではないよね。農家さんとかもさ、毎年同じルーティンっぽいけど変えてる

と思う。ポツキでさえ毎年変えるんだよ。チョコの厚さとか。同じ商品だと廃れるから、見た目一緒だけじゃ変わってるんだよ。ロングセラーってそういうことなんだ。すごいって思って。伝統と革新の話だね。

海士町はもつと可能性が開花するまちになれる

(阿部)

僕がこれから目指したい社会には、三つの要素がある。一つには人と人の関係性の話。人間関係が信頼ベースであるとか。もう一つは自然との関係性の話。自然は征服するものではなくて、一緒に活かしかうものという価値観。最後にもう一つあるとしたら、個人や組織、地域の可能性がどんどん開花していく社会。できないと思って諦めていたものが実はできる。可能性がどんどん開いていく。そういう社会をつくりたい。

僕には今度生まれる自分の子どもとか、周りの色んな社員の子供たちの顔が浮かんでいて、彼ら彼女らが大きくなる時にそれが残せたら、生きていて良かったと思えるかな。

海士町に関して言うと、人と人の関係性と自然との関係性はもともとあるんだけど、可能性が開花するところはもつといけると思っている。このお店（飲食店「きくらげちやかぼん」）のオーナーは海士町で福祉の仕事に就職して、研修で地元のおばあちゃんの食を教

わる機会があつて「これだ」と思ったらしいんだよね。こういうのを残していきたいと。福祉の施設で働きながら、おばあちゃんの暮らしの知恵を料理として提供して、

イベントで出店する。でもそれだけに留まらず職場を辞めて、勇気を持ってお金をはたいてお店を作ったんだよね。そういう可能性の扉を開く勇気ある人が、簡単に消えてほしくない。応援もしたいし。だから、そういうチャレンジは海士でできるんじゃないかなって。あとは、それをしようと思う世代が次々と生まれてくるかだね。

（聞き手・齋藤瑞生）



写真3 株主総会の様子



写真4 海士町の島民の方々と

【参考文献】

- ・海士町HP『2017年版海士町「わがトコ・わがコト調査」集計結果報告書』（2017年）
http://www.town.ama.shimane.jp/topics/pdf/2017amawagatokowagakoto_houkokusyo.pdf 2021年12月20日最終アクセス
- ・海士町HP『ふるさと納税を原資とした「海士町未来投資基金」を設置』（2020年）
<http://www.town.ama.shimane.jp/ko/45d33883b32d2a0e7be0bc877f4fcb7efd461e94.pdf> 2021年最終アクセス
- ・一般社団法人海士町未来投資委員会 HP <https://ama-future.org/> 2021年12月20日最終アクセス



長島 威年
ながしま たけとし

1983年東京都生まれ。
「学習する組織」に出会ったことがきっかけで人事領域に興味を湧き、パーソルホールディングスにて組織開発・人材開発に従事。2020年8月より海士町に移住。暮らしの中に社会課題があり、それを日々解決するこの島に次の時代に繋がる希望を見出している。14年間、続いている風と土とのバトンを受けつつ、次の世代にいい形でつなぎたい。



阿部 裕志
あべ ひろし

1978年愛媛県生まれ。
京都大学大学院にてチタン合金の研究で修士号を取得後、トヨタ自動車の生産技術エンジニアとして働くが、現代社会のあり方に疑問を抱き、2008年海士町に移住、起業。島のビジョン・戦略・プロジェクトを生み出す地域づくり事業、外の企業や自治体、大学の研修を島で行う人材育成事業を行うほか、辺境の島から温かい関係性を高める叡智を広げる出版社「海士の風」を立ち上げ準備中。